
未来の姿

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の姿

【Nコード】

N6548F

【作者名】

HERON

【あらすじ】

夢から現実に変わる恋愛。夢のような物語。

こんなしんどい朝は迎えたくないな。
そんなことが俺の頭に、ふと浮かんだ。

いつも通り学校に行き、家に帰ればすることは同じ。

青春時代になんでこんなことしているんだろう？ もう、高校三年生だっていうのに、そんなこと考えちまう。

しかし、今はそんなこと考えてる暇もない。早く学校に行く準備しないと……

なんだろう。凄い眠い。学校から帰ってきただけなのに……

もう駄目だ。布団をひいて寝よう。

……なんだ。今日の夢はいつもと違った。なんだかとても印象に残る夢だった。

その夢の中で、俺は喋ったこと。いや、見たことすらない女性と話をしていた。

だけど、その人と話をしている俺は、自分でもビックリするくらいの笑顔で笑ってて、生きているどんな時間よりも楽しくて、この夢がいつまでも続けばいいと願った。それくらい楽しい夢だった。

それが三日も続いた。

同じような夢を三日も見ることには不思議な気持ちを感じた俺は、夢の中で、女性に「誰ですか」と尋ねた。

「……………」

でも、女性からの返事はない。やっぱり夢の中の話が……少し残念だ。

目覚めた後、そんなことを色々考えている内に、いつの間にか空は暗くなり、日も変わるうとしてるじゃないか。

だが、そんなときに俺は友達にこの話を話したい衝動に駆られた。そう考えると行動は一つだ。俺は携帯に手を伸ばし、友達の晃あきを俺の家に呼んだ。

「どうした勇馬ゆうま。こんな時間に？」

「いや、実はな……」

俺は晃が来た途端に、夢の話を一心不乱に話した。

晃も、俺が真剣に話すことに驚いたのか、思ったよりも真剣に話を聞いてくれた。

「それ、夢の話だろ？ 妄想が膨らんでるだけだって。そんなことで悩んでる暇だったら現実で恋愛しようぜ」

「やっぱりな……真剣に聞いてくれたのはありがたいけど、どう考えてもまとまともな話じゃないもん。仕方ないか……」

「そんな落ち込むなよ。妄想の話じゃなくて現実の話ならいつでも相談のるからさ。じゃあ、明日バイトあるから今日はこれで帰るな」

「ああ……夜遅くに悪かったな」

それから、この夢が消えることはなかった。

毎日見続けることはなくなったが、それでもたまに、女性は俺の

夢の中に現れる。

その夢は、俺の受験勉強すら妨げた。でも、受験勉強をしていかないで大学に行くことはできない。出来るだけ、その夢を忘れるように努力した。

不思議なものだ。受験勉強をしている間。その夢を見ることはなかった。

夢を見なくなった俺は、不思議と肩の荷が下りたような感覚になり、受験勉強も捗った。そのお陰なのか、大学に合格することが出来た。

これは後から知った話なのだが、晃も俺と同じ大学を受験していたようだ。その夜は二人で盛り上がった。

大学に進学した後も、その夢を見ることはなかった。

だが、そんなときに出来事は起こるものだ。俺は、初めてそう感じた。

俺は、大学終わりに晃と街中を歩いていた。ただブラブラしたい。そんな目的しかなかった俺の眼に、驚くべき光景が飛び込んできた。

「どうした？ 急に立ち止まって。いい女でも見つけたか？」

俺は思わず固まってしまった。そして、嘘じゃないか眼を擦って確かめたりもした。

「いや……なんでもない。行こう」

そんなはずはない。きつと見間違いだ。そんなはずはない……

駄目だ。とうとう一日寝ることが出来なかった。このままじゃ体がもたない。

ちゃんと確かめよう。俺だって男だ。

「お〜い。帰ろっぜ」

いつものように声をかけてくれる晃。でも……

「ごめん。今日はちょっと用があるから無理だわ」

「そっか。じゃあ仕方ないな。また明日！」

そつだ。今日は帰る事はできない。俺は確かめなければならない。そつじゃなきゃ納得できそつもない。

俺は昨日と同じ場所で眼が痛くなるくらいに辺りを見渡した。

これほど何かに真剣になることは生まれて初めてかもしれない。受験勉強よりも頑張った。

時間だつて過ぎるのが早いように感じる。そう思っていたとき、俺の眼に、昨日と全く同じ光景が飛び込んできた。

それは……夢の中で何度も見た女性の姿だった。

いや、その女性ではないのかもしれない。でも、嘘じゃないかというくらい瓜二つだった。

俺は走った。周りも気にせず走った。そして、女性を呼び止め、声をかけた。

周りの人は、ナンパしてるんじゃないかという眼で俺を見る。でも、そんなことは今の俺には関係のないことだ。

「えっ？」

よかった。反応してくれた。なぜかそれだけで嬉しい。

「一緒にご飯でも食べに行きませんか!？」

「あのお……これってナンパですか？」

「あはは……そんなところです」

やっぱりいきなりは不味かったかなあ……

「うん。分かった。暇だしいいよ!」

よかった。いい人だ。普通なら断る。

俺達は初対面なので、最初はギクシャクしたものの、話を続けていくうちに、どんどん意気投合してきたように感じる。

そのお陰なのが、メールアドレスを聞くことが出来た。二十歳の女性で、名前は唯ゆい。いい名前だ。

「じゃあ、今日はこれで帰るね!」

「うん。いきなりごめん」

「別にいいよ。楽しかったし。じゃあ、またね!」

俺達は飯を食べた後、お開きとなった。

そして、家へ着いた俺は、迷惑だと思いつつも、唯にメールす

るために携帯を取り出した。

いきなりのことだから何をメールしていいのか迷った。
ふとその時、俺の頭の中に、あの夢の出来事の一つが思い浮かんだ。

夢の中の俺達は遊園地において、コーヒークップと一緒に回して、ジェットコースターにも一緒に乗って……あの時は叫んだりもしたなあ。観覧車に乗ったときはちょっとドキドキした。

そつだ。遊園地に誘おう。きっと楽しい。

俺は、唯に遊園地への誘いへのメールを送った。

これもまたいきなりの話だ。断られても仕方がない。だが、俺の携帯に返ってきた返信は、俺からするととても喜ばしい返事だった。内心、とてもホツとした。

約束の日、当日。

俺は、約束の時間よりも三十分前に着く予定だ。当然、俺が先に着く予定だったのだが、約束の場所に、唯はいた。いつからいたのだろうか……俺は思わず待ち合わせ時間を間違っていないか腕時計を見た。

「ごめん！ 早く来たつもりだったんだけど、遅かったかな？」

「別にいいよ。私が早く来たただけだから」

「じゃっ、行こうか！」

文句一つ言わずに、俺の手を引いてくれた唯に、少しドキツとし

た。

俺と唯は、今日の一日。色々な乗り物を楽しんだ。当然、コーヒーカップも、ジェットコースターも、観覧車にも乗った。

唯と色々な乗り物に乗って、唯の笑顔を見て、ドキツとする自分がいて……俺は自分の気持ちに気づいたんだ。

俺はいつのまにか唯のことが好きになってた。夢とかそういうのは関係ない。

俺は、唯のことが好きになっていたんだ。

遊園地を出た後、俺は勇気を振り絞って唯を近くの公園に行こうと誘った。

「ちょっとベンチに座って話しよう」

「うん。いいよ」

俺と唯は真夜中の公園のベンチに座った。

俺は、自分の手をさり気なく唯の手の上に置こうとした。

意外と唯は嫌がらなかったようで、何の文句も言わず手を置かせてくれた。

「どうしたの急に？」

「駄目かな？」

「ううん。いいよ」

その言葉に、俺は少し安心した。
それと同時に、俺には一つの決心がついた。

そう考えると体も勝手に動く。

俺はベンチから立ち上がり、唯の真正面に動いた。

「唯。真剣に俺の話聞いて欲しいんだ」

「急にどうしたの？」

不思議そうに俺を見る唯。

どうやらまだ、俺の気持ちには気づいていないようだ。

「俺、唯と初めて出会ったとき、いきなり唯を誘っただろ？ 実はあれ、理由があったんだ。笑わないで聞いて欲しい」

俺は唯に対して隠し事はいけない。そう思ったんだ。

だから、俺は夢のことを全て話した。これが全てのきっかけだから……

すると、唯からの笑い声が聞こえてきた。

確かにおかしい話だ。自分でもそう思う。笑ってしまうのも無理はない。

「あはは。勇馬君らしいや」

俺の勘違いだった。唯の笑い声は馬鹿にした笑い声じゃなくて……唯の純真無垢な言葉から、そんな気持ちが伝わってきた。

「でも、俺の中での唯は夢とかそういうの関係なくて……ただ唯の

純真な笑顔を見てると嫌なこととか全部忘れられる……そんな唯のことが俺は好きだ！」

気づくと俺は唯を抱きしめていた。

「……えっ？」

「……唯のこと大事にしてくれる？」

「唯のことは大事にするし守る。当たり前だろ？」

「うん……大事にしてね。約束だよ」

俺と唯は指切りをした。

場のムードもあつたのだろう。俺と唯は軽くキスをした。

その後、俺と唯は家に帰った。

そうだ。晃にも伝えとこう。一応、晃にも夢のことを話したしな。俺は携帯を取り出し、晃に電話した。

「こんな時間にどうしたんだ浩太？」

「実はな……」

俺は晃に今までのことを全て話した。

「本当にそんな話ってあるんだなあ……羨ましいよそんな出会い」

そう言った晃から笑い声が聞こえる。

「晃なら出会えるだろ絶対」

「勇馬みたいな出会いは無いってこと。夢から始まる出会いなんてよ」

そつだよな。こんな出会いが出来た俺はきつと幸せ者なんだろうな。

「おい勇馬。絶対に彼女を離すなよ。夢から出会いが始まって、夢のように出会いが終わるなんて、そんな笑えない冗談聞きたくないからよ。じゃあ、そろそろ寝るわ。勇馬の彼女、いつか紹介してくれな！」

分かってる。絶対に離さない。俺は唯と指切りして約束したもん

「ああ。自慢の友達として紹介してやるよ。じゃあ、夜遅くに悪かったな。おやすみ」

さあ。家に帰って寝るか。

今日は色々あったもんな。唯に告白したときの事を考えると、ずっとドキドキしてる。

だからか。全然眠れない。ドキドキして全然眠れない……でも、こういうドキドキが続くなら眠れなくてもいいな。なんだかいい気持ちだ。

それにしても俺が見たあの夢はなんだったんだろう。

本当に夢だったのだろうか。いや、きっと違う。

俺が見た夢は、未来から贈られてきた俺の未来の姿だったんだと

思う。

俺は、そんな自分の未来を大事にしていきたい。
唯の純真無垢な笑顔を、これからも大切にしたいから。

(後書き)

原作者。イエーチ(友達)

文章編集。推敲。HERON

初めて物語を書きましたが疲れました。

でも、自分の作った作品に愛情をもっています。by・イエーチ

初めて人に物語を考えてもらった作品ですが、なんだか自分で考
えて書くよりも緊張しますね。とても新鮮でした。by・HERO

N

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548f/>

未来の姿

2010年10月17日02時46分発行